町長ひとりごと

斉藤 譲

63

三月二十三日、月曜日の昼下がり時である。私は、大原町からお出でいただいた行政視察のご一行に、一くさり当町の町づくりを語り終え、いま町長室からぼんやりと窓の外をながめている。実は、昨日あたりから風邪気味で、どことなく身体の芯が熱っぽく、気持ちが集中できないでいる。気も滅入っているのであるが、これは風邪のせいではなく、広報担当の師岡女史に、今朝必ずこのひとりごとの原稿を渡す約束をしたのにも拘らず、いまだ一字も書けないでいる後ろめたさのためである。毎度のことながら、あれを書こう、これを書こうと思いながら、結局何もまとまらないまま、いたずらに時を遣り過ごしているのである。だが、心の中はこれとは裏腹に、ジリジリと焦っていた。何とも情け無い限りである。

▼朝から重く垂れこめていた曇り空から、ポツ、ポツと大粒の雨が降り出し、またたく間に駐車場のアスファルトや自動車の屋根を濡らしはじめ、しばらくするうちに本格的な雨足となった。まさに三寒四温の陽気であるが、温かさの後の雨は、一層冷え冷えとしている。窓の下では、この雨を突いて、原方の木原造園のご主人らが、二日後に予定している記念植樹の場所に、石枠をはめる作業をしていた。「雨の中を、ご苦労様です。」と声をかけたとき、いままでモヤモヤしていたひとりごとのテーマが咄嗟に決まった。

▼間もなく過ぎ去ろうとする平成三年度という年は、日本が世界の激流に揉まれ、一人経済大国と自惚れていたその鼻柱を、いやというほどにヘシ折られ、国家としてのあり方が、根本から厳しく問われた一年であった。また、バブルの崩壊と、この中で行われた数々の不祥事が次々と露見し、今まで経済は一流といわれた神話が一気に崩れ、また、三流といわれる政治は相変らずの体たらくで、国会はその機能を失うなど、全く惨憺たる状況を呈した。「日本沈没」という悲観的な思いが、心を過る。

しかし、これとは逆に、わが光町は、実に稔りの多い一年であった。何是ならば、懸案であった東陽病院が昨年六月に完成したのをはじめ、本年二月には、足かけ四年がかりで進めてきたスポーツ公園が竣工し、この間には念願の篠本地区への工業団地造成が、県企業庁で正式決定され、既に用地買収に入ったこと、更には町の誘致企業であるテイヒューが本格操業を始めたこと等、どれをとっても町の将来に欠かすことのできないビッグ・プロジェクトが、計画どおりに完成又は推進されたからである。

▼これが目にとまったのかどうかは定かではないが、この度わが光町は、全国町村会長から「優良町村」として表彰される栄誉に浴した。平成三年度の受賞町村は、全国で七十五団体、千葉県では当町の一町のみであった。この受賞は、充実した平成三年度を象徴するものがあり、誠に意義深いものがある。一応、表彰の事由は、光スポーツ公園の建設や国際化事業と人づくり政策、高齢者生きがい対策が評価に値するとのことであった。しかし、私はこれらの施策は、いずれも歴代の町政担当者や先輩諸兄が、努力して積み重ね築いてきた町づくりの一線延長上にあるものであって、決して現在の町政展開だけの成果ではないと思っている。

「継続は力なり」ということをつくづくと思い知る。更に加えれば、職員の努力も卒直に認めたい。

かつて帝人株式会社から、篠本の用地を町が肩替りしたとき、農地法上町は極めて厳しい状況に立たされたことがある。この時、浅野課長をはじめ担当の職員は、直接関東農政局に談判におもむき、「これが認められなければ町へは帰れない。」と必死に町の窮状を訴え、とうとう国もこの気迫に押され、町の主張を認めることとなった。

いま、職員は各分野で、こんな姿勢を貫き、努力をしている。町民の皆さんのご理解とご支援を得たい。

▼今回の受賞を祝って、庁舎の前に記念の植樹をすることにした。いろいろ考えた挙句、植える木は赤い花の咲くハナミズキと決めた。いま窓下で作業をしている木原さんも、町の行政委員であり、その辺の事情を知ってか心をこめて準備をしてくれているようだ。これから毎年、春にはこのハナミズキが、鮮かな花を咲かせることだろう。私達も、これに負けない大輪の花を町づくりの中で咲かせる決意だ。私は明後日、そんな万感の思いをこめて、一鍬入れたいと思っている。

ハナミズキ